

□海外文献紹介□

Guillain-Barré 症候群患者における *Campylobacter jejuni* 先行感染を示す血清学的な証拠

Serologic evidence of previous *Campylobacter jejuni* infection in patients with the Guillain-Barré syndrome: *Mishu B, et al* (Ann Intern Med 118: 947-953, 1993)

Guillain-Barré 症候群 (GBS) は、しばしば先行感染が証明されており、上気道炎のほか、胃腸炎、下痢も多い。この中で *Campylobacter jejuni* (CJ) が培養されることもまれではない。この論文は GBS の CJ 感染歴の有無を検討したものである。

研究デザインは case-control study で、大学医療センター数か所で行なわれた。患者は、1983 年より 1990 年まで臨床的に criteria を満た

した GBS で、発症 3 週間以内に血清の採取された 118 例である。ほかの神経疾患 56 例、健康人 47 例がコントロールである。CJ の血清 IgA, IgG, IgM 抗体を ELISA 法で測定した。

その結果、optical density ratio で 2 以上の反応が 2 つ以上の免疫グロブリンで陽性であった GBS は 43 例 36%、コントロールは 10 例 10% で有意に GBS に多くみられた。optical density ratio が上昇するほど、また免疫グロブリンが多種になるほど、GBS と CJ との関連が強く示唆された。また血清反応の陽性 GBS は、CJ の流行する 8、9 月に 2~3 週遅れる 9 月から 11 月に最も多くみられた。更に、男性は女性の 3 倍の頻度で CJ 血清反応が陽性であった。年齢ごとにみると、GBS 患者では高齢者になるほど CJ の血

清反応が高頻度に認められた。

GBS ではコントロールに比べ、神経症状が発現する数週間前に、CJ 感染があったことを示す血清反応が有意に高頻度で陽性であった。このことは、GBS の多くの例で CJ が症状発現の initiation に関与していることを示唆する。

〔訳者コメント〕 本論文にも引用されているが、結城伸泰先生が日本で先端的な業績を挙げられており、HLA B 35 との強い相関があることを「Neurology」誌に発表されている。CJ の型別でみると Penner 19 型が多いとされ、この菌の抗原がミエリンの GM1 オリゴ糖構造と類似しており、cross reaction を来し GBS を発症する、と結城先生は推定している。

(関東通信病院消化器内科

桜井 幸弘 抄)